

【海外学会報告】

韓国ケベック学会シンポジウム 参加報告 Colloque de l'ACEQ : « Traduction, Cinéma et Gabrielle Roy » le 31 octobre 2009 à Séoul

2009年10月31日に Université Korea（高麗大学）にて開催された第9回韓国ケベック学会「Traduction, Cinéma et Gabrielle Roy」(翻訳、映画、ガブリエル・ロワ)に、日本ケベック学会理事の加納由起子と山出裕子が出席し、研究発表を行った。学会は午後1時半に始まり、6時に終わった。コーヒープレイクをはさんで、6人の発表とそれぞれについてのコメンテーターとの討論があり、充実した内容だった。周到に準備された広い会場にはケベック文学の翻訳者、研究者、学生たちが40人ほど見られ、リラックスした雰囲気ながら、皆最初から最後まで熱心に発表と討論に聞き入り、ノートをとっていた。

同学会は、韓国ケベック学会の会長である HAN Daekyun 教授による、挨拶をかねたケベック韻文学の翻訳に関する講演で始まった。その後、2つのセッションに分かれた研究発表が行われたが、第1セッションは、翻訳学、女性文学、映画についての研究発表、第2セッションは、ガブリエル・ロワについての研究発表であった。

第1セッションでは、まずはじめに、加納理事による「Traduction japonaise de la littérature féminine québécoise — historique, problématiques, bilan」(ケベック女性文学の日本語訳——その経緯、特徴、概観)と題された発表があった。加納理事は、ケベック文学における女性を主人公とした作品の先駆けとして、1932年に男性作家であるルイ・エモン『マリア・シャプドレーヌ』が初邦訳されていることに触れ、その後、2002年に出版されたアキ・シマザキ『椿』までのケベック女性文学の邦訳を年代順に紹介した。加納理事は70年あまりの歴史を3つの時期に分け、それぞれの時期の翻訳状況の特徴を述べた。ケベック文学において女性を主人公とした作品の翻訳の歴史は、まず『マリア・シャプドレーヌ』が唯一の典拠であった長い時代の後、女性作家によって書かれた女性文学作品が現れ始めたことについて紹介。さらに、1970年代にアメリカとパリの出版動向に影響を受けたマリ

ー＝クレール・ブレとアンヌ・エベールの翻訳があったことについて触れた。そして1990年代には、英米のフェミニズムと同調した翻訳理論に刺激を受けた、英系カナダ文学の研究者によるニコル・ブロサールの翻訳があった。同時にポスト・コロニアルと移民文学への関心がそこに加わるようになる。加納理事は、日本におけるケベック文学の紹介は、女性を主人公とした男性作家作品に始まり、その後、3度にわたって女性作家の発見を通して行われたと述べた。

コメンテーターからは、1990年代の英系カナダ文学研究者の翻訳実践の意義について、質問を受けた。またHAN教授から、何故『マリア・シャプドレーヌ』のみが長く唯一のケベック文学の代表であったのか、という質問を受けた。最初の質問については、「脱構築主義翻訳理論のケーススタディという立場を超えて、カナダ産フランス語文学の独自性が認められたという意義がある」と答え、次の質問には「マリア・シャプドレーヌは当時未曾有の国際的ベストセラーであったために、このように早い時期に2度翻訳されるに至ったものと思われる。また、1990年代までケベック文学は日本にはいわば存在しないも等しかったので、当該小説の成功とケベックの日本における表象の間には、大きな関係はないと思われる」と答えた。さらに、現在朝鮮語で、『マリア・シャプドレーヌ』および、『アガクック』の初翻訳が進行中であることを教えられた。

次に、中国の *Université des langues étrangères de Canton* (広東外国語大学) の CHENG Yirong 教授による中国におけるケベックの韻文文学についての熱心な発表があった。CHENG 教授は中国におけるケベック詩の導入の歴史が浅いことを述べ、これからのグローバル社会にとっての詩文学の一般的必要性を述べた。

続いて、山出理事の発表として « *Traduction et féminisme dans les œuvres de Sherry Simon* » (シェリー・サイモンの作品に見られる翻訳性とフェミニズム) と題する発表が行われた。この発表では、近年の翻訳学の傾向について紹介し、特にケベックにおける翻訳論という観点で、バイリンガリズムとともに、女性翻訳家の役割に注目している、シェリー・サイモンの翻訳理論作品の特徴について紹介した。

まず、サイモンの代表的な著書である *Gender in Translation* に見られるフェミニスト翻訳理論の特徴について論じ、具体的な例として、ニコル・ブロサールの作品である *L'amèr* とフェミニスト翻訳家であるバーバラ・ゴダー

ルによる同著書の英訳 *All Our Mothers* を比較し、フェミニスト翻訳から生まれる創造性について論じた。次に、サイモンの最近の著作である *Translating Montreal* にみられる、モンリオールの多言語、複数民族の文化から生まれる翻訳性の特徴について論じた。特にサイモンは、この著書において、英語とフランス語の間の言語的緊張感に注目しており、そのような緊張感から生まれるモンリオール文化の特徴が、サイモンの翻訳論のよりどころとなっていることを指摘した。サイモンは、この文化的特徴を、翻訳論を通して積極的に評価しており、モンリオール文化の混血性を翻訳することが、その文化の特徴であるとしていることを強調した。その混血性は、サイモンの著作である *Hybridité culturelle* でも詳しく論じられており、これはケベックのバイリンガル翻訳家であり評論家でもあるサイモン自身のアイデンティティのよりどころにもなっているとの見解を示した。

さらに、このセッションの最後の発表として、韓国の *Université de Cheongju* (清洲大学) の SHIM Eun-Jin 教授によるケベックの映画と女性に関する発表が行われた。

第2セッションは、2009年10月3日に行われた「日本ケベック学会2009年度全国大会」の際に、韓国より招聘された2人の研究者の発表のために当てられたものであった。ここでは、*Université Sungkyoungwan* (成均館大学) の LEE Ji-Soon 教授による、ガブリエル・ロワの作品と韓国文学を比較した比較文学論の発表、*Université Kyung Hee* (慶熙大学) の OH Jung-Sook 教授による、ロワの自伝文学についての発表が、先日、日本で行われた発表と、ほぼ同じ形で行われた。

山出裕子／加納由起子
日本ケベック学会理事